「人間科学部」誕生、「文学部」を7学科編成に

2010年4月から
スタート

専修大学では、2010年度から人間科学部（2学科）が新設され、文学部は人文・ジャーナリズム学科の新設など7学科編成に生まれ変わります。人間を「心と社会」で理解する人間科学部、新たな「知の創造」をはぐくむ文学部――両学部9学科の特徴を紹介しましょう。

新設　人間を「心と社会」で理解

人間科学部

心理学科

〝科学のまなざし〟育て　総合的に「心」を調べる

▲　徹底した少人数教育でていねいに指導――心理学科の実習の様子

「基礎実験の授業が大変だった」。学生生活の思い出をたずねると、心理学科の卒業生は声をそろえてこう言います。心理学科では科学に根ざした実証性と現場に根ざした実践性の双方を重視しています。

そのためにまず基本となるのが実証的な精神であり、それを育てるのが1、2年次の必修科目である「基礎実験Ⅰ・Ⅱ」です。この科目を通じて、思いつきや権威に頼らず、事実を探求する科学のまなざしを育てたいと私たちは考えています。

科学のまなざしを育てるのはなかなか大変で、学生たちは毎週実験を行い、レポートを提出することになります。それでも、徹底した少人数で行われるこの授業に、学生たちはやりがいを感じているようです。コンピュータルームはいつも学生たちで大にぎわい。レポートを仕上げるため、グループで頭を寄せ合い、課題に取り組む姿がたくさん見られます。その中ではぐくまれる人間関係や、コミュニケーションスキルも大きな財産になると私たちは信じています。

基礎実験で身につけた科学のまなざしをベースに、学生たちは3、4年次生になるとカウンセリングや非行など心の実際的な問題から、心の発達、友人関係、知覚、学習、思考、そして脳活動など基礎的な心の過程までさまざまに学習の幅を広げます。

心理学は「心」をあらゆる面から調べる学問です。専修大学の本学科はそれができる全国でも数少ない総合的な心理学科です。来年度、新たに人間科学部心理学科へ生まれ変わることで、教員数も9人から14人に増員し、よりいっそう幅広く学べるようになります。

これからもバランスのとれた教育環境の下、科学のまなざしを持ち、知的好奇心に従ってさまざまな「心」を探求する学生を育てていきます。

（大久保　街亜）

社会学科

「足」で調べ問題発見　社会に働きかける力を

▲　社会調査実習で、調査対象者から熱心に話を聞く学生たち

大学に入学するまでは、なじみの少ない「社会学」は、1年次生にとって初めての内容であり、最初は自分の持つイメージとのギャップにとまどう学生もいるようです。そのため、社会学では特に導入教育に力を入れています。

まず「基礎ゼミナール」で少人数の共同研究に取り組み、社会学の基礎的スタンスと面白さを知ってもらいます。2年次では「社会調査実習」や「文献研究」により実践的な研究の経験を積み、3年次では「専門ゼミナール」で専門分野の研究、4年次の「専門ゼミナール」では個人の関心を重視した専門的研究を卒論として集大成させます。

少人数教育を基本に、社会学的思考を徐々に深化・展開させていく「しくみ」がここにはあります。専修の社会学では「フィールドワーク」（現場から発想する研究）を重視しており、「頭で考え、身体で感じ、足で調べる」ことに基盤を置いているのが大きな特色です。

その上で、「社会調査実習」科目を中心として、いくつかの関連科目を取得（資格取得プログラムあり）すれば、「社会調査士資格」（社団法人社会調査協会認定）を得ることができます（毎年30人程度が取得）。

2010年度、現社会学専攻は、人間科学部のなかの社会学科として新たな展開を迎えます。もちろん、導入教育に始まる基礎、展開、応用といったこれまでの「しくみ」と少人数教育はそのままに、その特徴をさらに充実させていきます。

柱は、専門領域を「文化・システム」系、「生活・福祉」系、「地域・エリアスタディーズ」系の3つに分けたことです。緩やかに結びあう各領域では10科目前後の専門科目を用意、学生は関心の高い領域での知識を深めつつ自分の視野をほかの領域に拡（ひろ）げたり、そこで得られた知識や経験を自分の専門領域へフィードバックさせたりして研究を深めます。

社会を見つめる基礎的な力を養い、問題発見能力を磨き、社会への働きかけを実践する力、そんな社会学的素養を身につけた学生のさらなる輩出を目指していきます。

（樋口　博美）

充実　新たな「知の創造」はぐくむ

文学部

日本語学科

日本語の知見身につけ　国際社会で活躍目指す

▲　全国の若者ことばの分布を調べる永瀬治郎教授の授業

文学部日本語学科は、日本語に関する深い理解と知識を身につけ、国際社会で活躍できるグローバルな視点を持った人材を育てることを目標としています。

日本語自体が持っている性質や特徴について、現代語のみならず、歴史的な資料研究も含め、多角的に分析・考察をすることは、日本語の特性を理解し、さらには日本文化の理解にもつながることです。それは同時にほかの外国語とその背景にある異文化についても理解を深める第一歩となるものです。

現代は情報化社会とも言われ、インターネットや情報端末は日常生活に必須のものとなりつつあり、そこでのコミュニケーションや情報収集に日本語の適切な運用と日本語情報処理の知識・技術は欠くことのできないものです。また、国際社会において、自分自身を的確に表現するためには、まず、日本語で的確な表現ができることが大切です。

日本語に関する豊かな知見を身につけることは、これからの国際社会で活躍する上で、基盤となる屋台骨を築き上げることでもあります。

こうしたことを踏まえ、日本語学科では、幅広く学生の言語に関する知的好奇心に対応できるよう、教員を新たに2人増員します。1年次の授業も、これまでの科目に加え、日本語学の面白さや、日本語学を学ぶ上での基本的な姿勢や知識を習得するために「日本語学総合」という授業を新規開講し、学科の教員全員がオムニバス形式で担当します。

また、毎年、韓国の湖南（ホナム）大学で約2週間、米国のオレゴン大学で約6週間の日本語教育実習も行って、異なる言語を母語とし、異文化を背景とする人に日本語を教えるという貴重な体験も得られるように配慮しています。

（加藤　安彦）

日本文学文化学科

「よみとく」「つたえる」「つくる」現場を経験

▲　比叡山・延暦寺を訪ねる夏合宿＝西條勉ゼミ

日本の文学と文化は、今、世界に向けて羽ばたいています。村上春樹の小説がさまざまな言語に翻訳され、宮崎駿のアニメ映画が各地で上映され、世界の人々を魅了しているのは周知のことでしょう。こうした日本の文学と文化について多角的かつ専門的に学ぶことができるのが日本文学文化学科です。

本学科では、古典研究など長い歴史をもつ伝統的な文学研究の方法を学ぶことができるだけでなく、より広く、文学をとりまく多彩な日本文化についての知識を身につけ、実践することができます。

その特徴は、文学・文化を「よみとく」「つたえる」「つくる」という3つの現場に触れられることです。

まず、作品を「よみとく」現場です。古典から現代にいたるまで、作品の読み方には一つの答えがあるわけではありません。わからないことを調べて読むと、難しいと思っていた古典文学が意外に身近に感じられたり、思いも寄らなかった解釈に気づいたり。授業はそのような現場なのです。

次は「つたえる」現場です。文学や文化を発信している出版などのメディア。新たな価値の創造ともいえる編集者の仕事について、大手出版社で活躍した経験をもつ教員から学ぶことができます。

そして、「つくる」現場です。「文藝創作」の授業では、小説家による創作の指導を受けることができ、「書道」の授業では、書家に初歩からの手ほどきを受けることができます。

新学科となるにあたっては、「芸能文化研究」「現代文化研究」を新たに科目に加え、文化の領域をさらに充実させました。芸能や映画などに実際に携わっている講師により、実践を交えた刺激的な授業が行われる予定です。

（廣瀬　玲子）

英語英米文学科

英語世界を幅広く理解　自らを表現する力養成

▲　ネーティブの教員から英語のプレゼンテーションを学ぶ

新カリキュラムの基本的な3つのコンセプトは「きめ細かな指導」、「参加型・発信型の授業の展開」および「英語力と教養の充実」です。特に初年次教育を重視し、新設科目である「英語英米文学入門」では、2年次から学ぶ英米文学、英米研究、英語学、応用言語学の4分野の概要をわかりやすく紹介するとともに、レポートの書き方などのアカデミック・スキルも身につけていきます。

また20人程度の少人数で行われる「Special English」では、各学生の英語力や興味を配慮したきめ細かな指導により総合的な英語力を育成することを目指します。

2年次以降は2つのコースに分かれ、「英語文化コース」では、英語ということばの仕組みや歴史、英米の文学、そして英語の文化的背景について学んでいきます。「英語コミュニケーションコース」は1年次で養った英語力をさらに向上させ、さまざまなコミュニケーションの場面に対応できる運用力を身につけることが目的です。「中期留学」という科目を通じ、アメリカやニュージーランドなどで行われる4～5カ月の英語研修プログラムへの参加を積極的に奨励しています。

3年次以降、各学生はゼミナールに所属し、英語の運用力を高めるとともに専門的な知識をさらに深めていくことになります。英語英米文学科では約15人から20人になる小規模編成によるゼミナールを展開しており、学生と教員及び学生同士の関係も緊密です。

4年次には大学での学習の最終的な成果として卒業研究に取り組みますが、英語英米文学科では学生の創造性に応えることができるよう、「論文形式」だけでなく、通訳コンテスト、プレゼンテーション、ホームページの作成、翻訳作品などの斬新で多様な形態を取り入れています。

（上村　妙子）

哲学科

哲学のさまざまな顔を　観光して歩いてみよう

▲　哲学を広く、深く学ぶ

哲学を学んでみたいと思っている人の多くは、現代の社会で当然と考えられていることにちょっとした違和感を抱いていたり、世の中では表だって問われないような疑問をもう少しちゃんと考えてみたいと思っているのではないでしょうか。

けれども、そうした違和感や疑問をきっちりと言葉で表現することはなかなか難しい。また、自分の問いがどういった哲学や思想につながっているのかをしっかり理解できるわけでもない。これは哲学を学んでみようという人が常に抱える困難の一つです。

なにしろ、大学入学以前に学校で「哲学」を教わることはほとんどないのですから。新しい「哲学科」では、そういう人たちにぜひ来てもらいたい、そして大いに哲学を学んでもらいたい、と考えています。

そのために、哲学に興味はあるが、今までちゃんと勉強したことはないという人が、できるかぎりスムーズに哲学という専門の勉強に入っていけるように、いくつかの仕組みを作りました。例えば「哲学の手引き」という新しい科目は、哲学科の全スタッフが交代で講義をします。

これによって、哲学のほとんどあらゆる分野を観光して歩くことができます。新入生は観光客気分で哲学のさまざまな顔を見て歩けばよい、もしその中に自分の問いとの接点が一つでも見つかれば、それを基点に本格的な勉強に取りかかればよい、というわけです。

また「基礎ゼミナール」では、本格的にやっていくための技術や方法をしっかりと身につけるための練習を、いろいろな題材を使ってやっていきます。

2010年度から従来の「哲学人間学専攻」は「哲学科」になりますが、これは単なる名称の変更ではありません。いま述べたような仕組みの導入や、芸術にかかわる思想を中心に新しい科目が続々と導入されるなど、興味と意欲のある人には本当に楽しめる、そしてどんどん本格的な研究へと入って行ける、そのような改革です。

（金子　洋之）

歴史学科

従来の枠組みを超えて　視野広め「人間」考える

▲　考古学実習の発掘調査＝群馬県・山名伊勢塚古墳

高校生のみなさんに教科としての歴史学のイメージを聞くと、多くの人が暗記科目だと答えます。確かに年号や人名など覚えた方が便利なものが多いことは事実です。しかし、覚えることが学問でしょうか？　歴史学は過去を学び、それを通して現在を、そして将来を考える学問です。また、そうした事実すべてにかかわった人々、つまり人間について考える学問だといえます。

専修大学の歴史学科では、日本史・東洋史・西洋史という従来の枠組みにとらわれず、それらが絡み合った実際の歴史を学びます。例えば女王「卑弥呼」は景初3年（239）に魏へ使者を派遣しましたが、これはその前年に魏が遼東半島から朝鮮半島北部にかけて勢力を有していた公孫氏を滅ぼしたことと深く関係しています。

つまり、中間に位置した公孫氏が滅び、魏がこれまで以上に身近になったため、その脅威を感じたからにほかなりません。このように歴史の深奥に迫るためには地域や時代を限定せず、より広い視野から考える姿勢が不可欠です。

世界のさまざまな地域や国がどのように連動し、ひとつの出来事が次の時代に何を引き起こしていくのか。地理的なつながりと時代の連続性を理解したうえで、一人ひとりが関心を持った時代やテーマを深く掘り下げてほしいと思います。

歴史学科では、このような深い専門性と広い視野の双方に配慮した科目編成をしています。また、歴史を学ぶうえで最も基本となる文献史料・考古資料の読み方、扱い方などの授業も設けています。こうしてより専門性の高い大学院に進学しても、困ることのないような訓練を学部時代に受けることになっています。

もちろん、多くの人は就職しますが、歴史学科で学んだ歴史をよむ力、そして人間に対する深い理解は、必ず人生の糧となるに違いありません。

（土生田純之）

環境地理学科

現実の社会・自然の中に　身を置いて現象を理解

▲　木曽駒ヶ岳で行った気象観測実習

環境地理学科の特色は、学際的領域の探究、フィールドワーク、地理情報教育、少人数教育の四つです。人文・社会科学と自然科学の双方を分け隔てなく学びながら、日本や世界各地の都市や農村で起きている環境問題・社会問題の深層を理解し、またその解決方法を探っていきます。

そのためには教室や図書館での学習だけではなく、フィールドで考えることが不可欠です。環境地理学科の授業では、しばしばフィールドに出かけ、現実の社会や自然の中に身を置いて問題や現象を理解することを大切にしています。

一方で、近年進歩の著しい地理情報学分野のコンピュータ教育にも力を入れています。野外で計測したデータや衛星画像データなどを地理情報システム（GIS）やリモートセンシングといった技術を用いて分析します。

環境地理学科の専門科目は少人数の授業を基本とし、教員と学生、学生と学生の間での知的交流を重視した授業を目指しています。授業以外の時間にも教員と学生の交流が頻繁にあって、和気あいあいとした雰囲気です。

ゼミナールは、徹底した少人数教育によって、企画力・分析力・プレゼンテーション能力などを実践的に身につける場になっています。ゼミでの研究テーマは国内のみならず海外にも展開し、2年間かけてじっくりと取り組んで卒業論文としてまとめます。

最近の卒論の研究テーマには、エルニーニョ現象が台風発生に与える影響、作曲技法分析にもとづくアラブ音楽の風土性、上海市旧市街地の再生と課題、小谷村の斜面変動災害と集落の変遷、「明暦江戸大絵図」の歴史地理学的研究、首都圏における病児保育の現状と課題、「台東区の歌」に表現された台東区、沖縄県羽地内海における赤土汚染などがあり、学生たちはさまざまなテーマに意欲的に取り組んでいます。

（高岡　貞夫）

人文・ジャーナリズム学科

真実を見抜く「目」育て　批判力と行動力を養う

▲　フィールドワークで沖縄戦跡のガマ（自然壕）を視察

人文・ジャーナリズム学科は、日本で初めて「ジャーナリズム」を学科名に冠した学科です。

「ジャーナリズム」という言葉には情報に流されず、自分の言葉で他者と対話する力を身につけるという思いをこめています。そして「人文」という言葉は、多様な視点の基盤となる幅広い教養を指し、文学部が長年培ってきたリベラルアーツの伝統をもとに、学生の真実を見抜く目を育て、批判力と行動力を養うことに重きを置きます。こうした目的を達成するため、この新学科には、「東西文化コース」「生涯学習コース」「ジャーナリズムコース」の三つのコースを設けました。

今日の日本社会をめぐる課題は、地球規模で進む国際化・情報化と、少子高齢化の二つに代表されます。人文・ジャーナリズム学科は、この課題と正面から向かい合います。

「東西文化コース」は、グローバル化社会の中で、外国語の習得を基礎として、世界の多様な文化の歴史と特質を理解し、かつその人々と自然体で対話できる柔軟な思考力を持つ人材の育成を、「生涯学習コース」は、少子高齢化社会の中で、生涯にわたって健康で生き甲斐（がい）に溢（あふ）れた社会を創造するために、生涯学習や生涯スポーツの分野の専門的・実践的な知識を有する指導者の育成を行います。

そして「ジャーナリズムコース」は、情報化社会の中で、情報ツールを的確に使いこなして正確に情報を収集・分析し、それを社会に対してコミュニケートする所作を身につけた人材の育成を目指します。

1年次は、3コースにまたがる「学科の基礎科目」を学び、2年次になる時にコースを選択します。またコース選択後も、コースをまたいだ幅広い学習が可能であり、学生の多様な関心に最後まで対応できるようにカリキュラムを工夫しています。

（松原　朗）